Japan Foundation for
Regional Art-Activities

地域創造レター

News Letter to Arts Crew

4月号—No.276
2018.3.25
（毎月1回25日発行）

【梅重（うめがさね）】紅梅のような明るい紅色のこと。

春の訪れを告げる花として古来から親しまれてきた梅。色としても薄紅梅、紅梅、濃紅梅、薄梅鼠、灰梅とさまざまなバリエーションがあり、平安時代の十二単で色を襲ねて楽しんできた。梅重は、表地を濃紅、裏地を紅梅にして深みを出した色のことで、口紅にでもすればいいような匂い立つ色。

●目次／*contents*

今月のニュース……2
ステージラボ横浜セッション報告
財団からのお知らせ……4
第18回地域伝統芸能まつり開催／ステージラボ滋賀セッション参加者募集／雑誌「地域創造」第43号のご案内／平成28・29年度「公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業」報告／平成29年度「リージョナルシアター事業」報告
今月の情報……7
地域通信
制作基礎知識シリーズ Vol.43……10
東京文化プログラムとTokyo Tokyo FESTIVAL
今月のレポート……12
山梨県甲府市　コラニー文化ホール
ミュージカル『シンデレラ〜ねずみたちのプリンセス』

発行元：一般財団法人地域創造
〒107-0052 東京都港区赤坂2-9-11
オリックス赤坂2丁目ビル9F
Tel. 03-5573-4066　Fax. 03-5573-4060
URL: http://www.jafra.or.jp/

●ステージラボ横浜セッション

インクルージョン事業を題材に議論が行われるなど、充実した研修に

ステージラボ横浜セッション報告

2018年2月20日～23日

地域創造は財団設立以来、20年以上にわたって人材育成事業に力を入れてきました。その中心となっているのが年度の上半期(7月頃)と下半期(2月頃)の年2回開催してきたステージラボです。地域のニーズを踏まえ、コースなどの内容をリニューアルしてきましたが、今年度は上半期は地域の文化施設を会場とした地域開催、下半期は利便性に配慮した首都圏開催として実施することとしました。首都圏開催の今回は、今年20周年を迎える横浜みなとみらいホールで開催されました。今回は小ホールなどを貸し切り、2コースが開講されました。共通プログラムでは、横浜みなとみらいホールが取り組んできたインクルージョン事業を題材に議論が行われるなど、充実した研修となりました。

●新たなホールの役割～入門コース

ホール入門コースのコーディネーターを務めたのは、全国の公立文化施設の動向にも詳しい劇場コンサルタントの草加叔也さんです。今回は、劇場・音楽堂の新たな役割を考えるための基礎知識や事例を学ぶとともに、身体表現の魅力やホール職員としての立ち居振る舞いを学ぶワークショップが行われました。

まず、基礎知識として昨年6月に改正された「文化芸術基本法(旧・文化芸術振興基本法)」について、「文化芸術そのものの振興に加え、観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等の関連分野との有機的な連携」を図ることや、「年齢、障害の有無または経済的な状況」に関わらず文化芸術を享受できる環境整備の必要性が明記されたことなど、より社会との関わりが問われるようになった公立ホールの現状を学びました。

そうした開かれた劇場の取り組みとして紹介されたのが、埼玉県の富士見市民文化会館キラリ☆ふじみが行っている広場型事業の「サーカス・バザール」(地域の物産によるバザールとサーカスや大道芸などのパフォーマンスを合体させたイベント)と「ふじみ大地の収穫祭」(市内の農家と連携した物産展、郷土芸能や盆踊り、トークなどが合体したイベント)です。仕掛け人である松井憲太郎館長は、「人口11万人の富士見市で私たち劇場の人間が繋がれているのは多く見積もっても2,000人ぐらい。残りの10万8,000人の内、ひとりでも多く劇場に足を運んでいただくために何ができるかを考えた。市内で暮らすたくさんの魅力的な生活者が交流し、劇場の楽しさにふれる場としてイベントを立ち上げた」と話します。

「面白そうだけど、どうしたらいいかわからない」という新人職員たちに対し、松井館長は、「一度、文化施設の外の立場に立って考えてみることが必要。できもしないきれいごとの計画をつくるのではなく、自分たちの問題点を見つ

写真

左上：共通プログラムでは、横浜みなとみらいホールが実践するクリエイティブ・インクルージョンの試みから学ぶ。受講生は、視覚障がい者が誘導を受ける体験をアイマスクをして歩くことで体感する

右上：箏・三味線奏者の中彩香能さん(左)と五十川真子さん(左から二人目)が受講生の質問に答える

左下：セレノグラフィカによるワークショップで身体をほぐす

右下：星乃もと子さん(シアターマネージメントプラン代表)からホール表方の基礎を学ぶ(チケットのもぎり方の実践)

●コースコーディネーター
◎ホール入門コース
草加叔也(有限会社空間創造研究所 代表)
◎自主事業(音楽)コース
児玉真(一般財団法人地域創造 プロデューサー)

めながら、面白いことに向かいたいというチャレンジ精神をもって臨むことが大切」など、親身にアドバイスしていました。

このほか、チケットもぎり体験やダンスのワークショップも行われるなど、受講生たちは頭と身体を存分に動かしていました。

●邦楽に親しむ〜自主事業（音楽）コース

音楽コースのコーディネーターを務めたのは、地域創造プロデューサーの児玉真さんです。地域創造では、小中学校での和楽器教育が本格化したことを受けて、09年度から「邦楽地域活性化事業」をスタート。今回のラボでは、そうした邦楽への理解を深めてもらおうと、箏・三味線奏者の中彩香能さんと五十川真子さんによる邦楽ワークショップ体験を行うとともに、演奏家と受講生がフランクに語り合いました。

「邦楽を身近に感じてもらうために、どこまで演出が許されるのかがわからない」という質問に対し、「そのほうが身近に感じてもらえるならやるべきだと思う。歌舞伎でもイヤホンガイドがあるし、馴染みがない分、何とか理解してもらいたいと思っているので、若い邦楽演奏家でそうした演出を嫌がる人はあまりいない」「何を伝えたいかによっても異なる。音だけ聴いてもらう、視覚に訴える、参加型にするなど飽きずに邦楽にふれてもらえるようなプログラムづくりを心がけている」など活発な意見交換が行われました。

また、音楽コースでも広場型事業が取り上げられ、子育て世代の広場としてユニークな活動を行っている神戸市立灘区民ホールが紹介されました。灘区民ホールでは、「すべての市民にとって価値ある場所」を目指し、事業予算の8割以上を子どもや子育て世代に向けて展開。「0歳からのクラシックコンサート」、ベビーカーで来場できる「ベビクラ！」、近所のママたちが集まって企画・実施するバザール「なだMAMA FESTA」、夏にロビーを開放するクールスポット事業、商店街と連携してアーティストを派遣する事業、クラウドファンディングで資金を集めたアウトリーチ事業などなど。

ホールの担当者で仕掛け人の衣川絵里子さんは、「子ども向け事業をやるうちに近所のママたちが何かやりたがっているのがわかり、MAMA FESTAを始めた。ベビクラ！はコンサート後にロビーで交流会を行うなどママたちの社交場を目指した事業で、緩やかなテーマ型コミュニティになればと思った。地域の人たちがやりたいことをまずは受け入れて、ホールがもっている勝手なルールはできる限りなくし、問題は一緒に考え、常に新しい視点を提案することを心がけている」と話し、受講生たちは目からウロコの面持ちでした。

●

インクルージョン事業をテーマにした共通プログラムは、受講生たちが目隠しをして歩く体験からスタート。1ドルコンサートに来場した視覚障がい者からパイプオルガンの形を尋ねられたことがきっかけで始まったという、横浜みなとみらいホールと横浜市立盲特別支援学校とのパイプオルガン体験事業や、東京藝術大学とともに実施している発達障がいの子どもたちを対象にした事業のほか、東京藝術大学特任教授の新井鷗子さんによる最新のインクルージョン事業の紹介も行われました。

共通プログラムで行われた事例発表では、東京藝術大学特任教授の新井鷗子さんがプロジェクトを主導し、横浜みなとみらいホールでも実施された「障がいとアーツ」をはじめとする最新のインクルージョン事業に関する内容を詳しく紹介

ステージラボ横浜セッション プログラム表

	ホール入門コース	自主事業（音楽）コース
第1日	開講式／オリエンテーション・施設見学等	
	「所属する劇場・音楽堂と自分の仕事を紹介」 草加叔也	「自己紹介と共有の時間」 児玉真
	全体交流会	
第2日	「先進事例施設から学ぶ①：富士見市民会館キラリ☆ふじみ」 松井憲太郎	「和楽器と遊ぶ楽しさを体験する」 中彩香能、五十川真子
	「身体表現（ダンス）から学ぶ」 セレノグラフィカ（隅地茉歩／阿比留修一）	「邦楽器奏者の生き方とコミュニティとの関係を探る質問コーナー」 中彩香能、五十川真子
		「コミュニティ・エンゲージメントを考える」 児玉真
	「劇場・音楽堂が担う役割を学ぶ①」 草加叔也	「いわきアリオスのコミュニティ事業〜アリオスの過疎地へのプログラム」 矢吹修一、児玉真
	共通プログラム　グループディスカッション「インクルージョン事業について考える」 〜横浜みなとみらいホールの事例を交えて〜　新井鷗子、菊地健一、堀利文	
第3日	「先進事例施設から学ぶ②：パルコ劇場」 佐藤玄	「小さな区民ホールがそのまちにできること（灘区民ホールの冒険）」 衣川絵里子、児玉真
	「劇場・音楽堂等の職員として、知っておくべき『表方の基礎』を学ぶ」 星乃もと子	「新たな劇場がまちに。「育成」を理念に掲げたサントミューゼの試み」 田澤拓朗、児玉真
		「「おんぱく」とはなにか？〜長久手の話を聞く」 生田創（長久手市文化の家）、児玉真
	「劇場・音楽堂が担う役割を学ぶ②」 草加叔也	「私の街のコミュニティと音楽家で作る3カ年計画（グループワーク）」矢吹修一、衣川絵里子、田澤拓朗、生田創、児玉真
	「先進事例施設から学ぶ③：北九州芸術劇場」 龍亜希、草加叔也	
第4日	「研修のまとめと発表」 草加叔也	「グループワークの続きと発表。ホールからの発信から協働からの発進へ」 児玉真
	修了式	

財団からのお知らせ

●第18回地域伝統芸能まつり開催

写真：第18回地域伝統芸能まつりのステージから
左：鬼太鼓（新潟県佐渡市）
右：フィナーレの模様

これまで176の全国各地の地域伝統芸能を紹介してきた「地域伝統芸能まつり」が、2月25日（日）にＮＨＫホールで開催されました。今年のテーマは「鬼～山に棲む、里に棲む、心に棲む」。日本各地の地域伝統芸能7演目と古典芸能1演目が披露され、2,200人以上の観客を魅了しました。

オープニングでは、鼓の音とともに緞帳が上がると、ステージは空舞台。司会者の合図で、数々の舞台をつくり上げてきた美術方がセットを組み上げる演出に、観客は圧倒されました。

最初の演目は、千葉県野田市から「野田のつく舞」です。高さ10メートルにも及ぶ柱を立て、「ジュウジロウサン」と呼ばれる演者が、柱や樽の上、柱から張られた縄の上で妙技を披露する様子に、客席は緊張感が漂いつつも、歓声が上がりました。

次に登場した、新潟県佐渡市の「鬼太鼓」は、佐渡独自の伝統芸能として、島内の120を超える集落で伝承されています。子ども・青年会・保存会の3世代による共演で、このフェスティバルが目指す、地域の伝統芸能を継承する一端が垣間見えました。

続いて、高知県椿原町の「津野山神楽」。テンポの速い楽（囃子）に合わせた舞で、18節の中から「鬼神退治」を披露しました。長年コンビを組んできた鬼と神の絶妙な舞に観客は魅了され、神が鬼のかしらを取ると勝利のムードに包まれました。

兵庫県姫路市の「中野獅子舞」は、梯子をピラミッド型に組む初めての形で、釣り子と言われる猿とひょっとこに煽られた雄獅子は徐々に梯子を登り始め、頂上で離れ業を演じます。曲芸的に舞う獅子に観客は引き込まれていきました。

そして第2部は、フェスティバルのもう一つの柱である古典芸能から始まります。今回は、福島県二本松市を舞台にした能『安達原』を大槻文藏らが演じ、これまでの地域伝統芸能から一転、ステージ上に能舞台が設置され、前半のしみじみした場面から老女が般若の姿へと変わる展開に目が離せませんでした。

舞台は伝統芸能に戻り、実行委員会の鎌田委員が岩手県北上市「鬼剣舞」の起源を語り幕が開けます。鬼は仏の化身とされ、角のない面が特徴の鬼剣舞は、雪山風景を背に、自分でつくったお面を着けて踊る子どもたちと、大人の勇壮で力強い踊り振りで観客を魅了しました。

そして、鹿児島県日置市は「伊作太鼓踊」。重さ18キロの装備を身に纏い、太鼓を叩きながら矢旗を大きくゆすって勇壮に躍る“平打ち”と、その輪の中で踊る子どもたちの“中打ち”が奏でるリズムがホール全体に響き渡りました。

最後に登場したのは、島根県浜田市の「石見神楽」。下重委員による解説を交え、石見神楽を代表する「大蛇」が披露されました。色鮮やかな8つの大蛇がうねり立ち、激しく演舞すると、会場は一気に最高潮に盛り上がりました。

会場の興奮が冷めやらぬ中、フィナーレには全出演者が再登場。客席からは、各地域で伝統芸能を保存・継承してこられた出演者の方々への敬意と今後への期待を込めた盛大な拍手が惜しみなく送られ、第18回地域伝統芸能まつりは幕を閉じました。

●第18回地域伝統芸能まつり
[会期]2018年2月25日（日）
[会場]NHKホール（東京都渋谷区）
[主催]地域伝統芸能まつり実行委員会、一般財団法人地域創造
[実行委員]板倉敏和、梅原猛、鎌田東二、香山充弘、菅康弘、下重暁子、田村孝子、安田充、山折哲雄、山本容子（50音順、敬称略）
[後援]総務省、文化庁、観光庁、NHK
◎演目・出演自治体
- 野田のつく舞（千葉県野田市）
- 鬼太鼓（新潟県佐渡市）
- 津野山神楽（高知県椿原町）
- 中野獅子舞（兵庫県姫路市）
- 能『安達原』短縮版
  出演：大槻文藏ほか
- 鬼剣舞（岩手県北上市）
- 伊作太鼓踊（鹿児島県日置市）
- 石見神楽（島根県浜田市）

●ステージラボ滋賀セッション参加者募集

ステージラボは、公立文化施設等の職員を対象に、ワークショップなど体験型プログラムやグループディスカッションなど、講師と参加者の双方向コミュニケーションを重視したカリキュラムに取り組む、少人数形式の実践的な研修事業です。

平成30年度は、2018年7月3日(火)～6日(金)に滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールで開催します。概要は以下のとおりです。参加ご希望の方は、当財団ウェブサイトでお申し込みください(右欄参照)。皆さまのご参加をお待ちしております。

なお、今年度のステージラボは、滋賀セッションの1回のみの開催となります。

募集締切:5月6日(日)必着

◎ホール入門コース(定員20人程度)

[コーディネーター]吉本光宏((株)ニッセイ基礎研究所研究理事[社会研究部 芸術文化プロジェクト室長])

[対象者]公共ホール・劇場(開館準備のための組織を含む)において、業務経験年数1年半未満(開館準備のための組織にあっては年数不問)の職員

[コース特色]劇場やホールの仕事は地域にとってどんな意味や価値があるのか、そこにはどんな可能性があるのか、そして乗り越えなければならないハードルは何なのか。全国各地の先行事例に学び、アーティストのワークショップを体験しながら、参加者の皆さんと一緒に考えていきます。

◎事業入門コース(定員20人程度)

[コーディネーター]津村卓(上田市交流文化芸術センター館長/北九州芸術劇場顧問/地域創造プロデューサー)

[対象者]自主事業を実施している公共ホール・劇場において、業務経験年数が1～3年程度の職員

[コース特色]芸術文化が子どもへの教育や、福祉そして街づくりといった社会の課題に対し大きな要素として取り上げられています。ただ並行して芸術本来の意味や、アーティストの存在の軽視も起こっている気がします。今回のラボは、公演やクリエーションを基に、劇場・ホールの必要性を考えたいと思います。

◎自主事業(音楽)コース(定員20人程度)

[コーディネーター]中村透(作曲家/芸術文化学博士/琉球大学名誉教授/静岡県コンベンションアーツセンターグランシップ芸術監督/地域創造顧問)

[対象者]自主事業を実施している公共ホール・劇場で、音楽の自主事業に積極的に取り組みたいと考えている、業務経験年数が2～3年程度の職員

[コース特色]どんな場所であっても、そこに人の生きてきた歴史があり、その時の流れに今も人が生き続けているならば、そこはひとつの宇宙なのである。…劇作家井上ひさしが、宮澤賢治の“くに”の老婆に語らせたことばです。わずか150年前までの日本は、“くに”という名のたくさんの宇宙から成り立っていました。気づかないまま見過ごしてきた“くに”の宝を見つけ出しませんか? 見出した宝をまずはリスペクトし、その中から新しい音楽芸術を生み出す種をともに探りましょう。

●ステージラボ滋賀セッション参加申し込み方法
当財団ウェブサイト内の「様式箱」→「ステージラボ」より参加申込書、申込アンケートをダウンロードし、必要事項をご記入の上、メールでお申し込みください。
http://www.jafra.or.jp/j/guide/box/

◎申し込み・問い合わせ
芸術環境部　研修担当
Tel. 03-5573-4068
kensyu@jafra.or.jp

●雑誌「地域創造」に関する問い合わせ
芸術環境部　雑誌担当
Tel. 03-5573-4093

●雑誌「地域創造」第43号のご案内

公立文化施設等の職員を対象とした芸術環境づくりのための雑誌『地域創造』第43号を、3月25日に発行します。今回の特集は、2007年の制度発足以降、近年ますます地域で重要な役割を担う「地域おこし協力隊」を取材。各地で活躍する現役隊員、隊員を卒業後も現地に定住し、さまざまな取り組みを行うOB・OGの姿に迫ります。

○特集「地域おこし協力隊の可能性」
- 大分県竹田市
- 新潟県十日町市
- 熊本県菊池市
- 概説 地域おこし協力隊の制度とこれまでの実績

○空間のエスプリ—国際的事例のビジュアルレポート
バタシー・アート・センター(英国)

○体験レッスン—公立文化施設職員・文化政策担当者へのノウハウ伝授
ひと・アート・コミュニティが繋がる
キラリ☆ふじみの入り口事業に学ぶ

○座談会
レジデンスを考える

○SCOPE—地域の注目事例レポート
- 浦添市民ミュージカル『尚寧王』(沖縄県浦添市)
- 「障害者の芸術文化について考える3日間」(滋賀県大津市)

○イラストSCOPE—伝統芸能・古典芸能・祭りなど伝承の取り組みのイラストレポート
横仙歌舞伎(岡山県奈義町)

○海外スタディ—海外の文化政策・制度紹介
リヨン(フランス)のダンス政策

○BOOK
『地域おこし協力隊 日本を元気にする60人の挑戦』

財団からのお知らせ

●平成28・29年度「公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業」愛知セッション報告

平成16年度より始まった本事業は都道府県と連携し、地域での演奏活動を通して創造性豊かな地域づくりに資することを目的として実施しています。今回、14回目の開催地となった愛知県では、愛知県芸術劇場と新城市、田原市、知立市、扶桑町、碧南市、豊川市の県内6市町が参加しました。

平成29年7月に、オーディションにより選出された3組のアーティスト、Les Vents Japonais（木管五重奏）、Adam（サクソフォン四重奏）、Trio Minpia（ピアノトリオ）が参加し、愛知県芸術劇場で合宿形式の研修を実施しました。そこで45分間のアウトリーチプログラムをつくり上げ、名古屋市内の小学校を訪問し、アウトリーチを行いました。どのグループも試行錯誤を繰り返し、夜中までプログラムづくりに取り組んでいる姿が印象的でした。

平成29年9月～30年1月にはそれぞれのアンサンブルが担当する2市町で、小学校等でのアウトリーチ6回とホールでのコンサートを実施しました。いずれも好評を得ましたが、そこで満足することなく、子どもたちとふれあう中で感じた課題などについて、メンバー間はもちろん、担当コーディネーターやホール担当者とも議論を交わし、チームー丸となってプログラムの内容を更に高めていきました。

2月に三井住友海上しらかわホールで行われたガラコンサートでは、3組のアンサンブルが一堂に会して共演しました。オープニングの合同演奏に続いてアンサンブルごとに演奏を披露。最後は再び全員がステージに集結し、盛大に締めくくりました。それぞれのアンサンブルの魅力が詰まった特別なコンサートとなり、本事業の集大成と言える公演となりました。

県および市町の担当者、その他事業に携わった方それぞれの立場で、学び多い事業となり、また、今後の愛知県内における連携の可能性と展開が期待できるものとなりました。

三井住友海上しらかわホールでのガラコンサート

●公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業に関する問い合わせ
芸術環境部　音楽担当
Tel. 03-5573-4059

●リージョナルシアター事業に関する問い合わせ
芸術環境部　演劇担当
Tel. 03-5573-4124

●平成29年度「リージョナルシアター事業」報告

演出家を公共ホールに派遣し、アウトリーチやワークショップを実施する「リージョナルシアター事業」。今年度は福島県会津市（會津風雅堂）、富山県高岡市（高岡市民会館）、広島県三次市（三次市民ホールきりり）、神奈川県（神奈川県立青少年センター）、静岡県袋井市（袋井市メロープラザ）、広島県廿日市市（はつかいち文化ホール）、東京都豊島区（としま未来文化財団）、京都府舞鶴市（舞鶴市総合文化会館）の計8地域で開催しました。

街の規模もホールのミッションもさまざまな中で、5名の派遣アーティスト（有門正太郎、ごまのはえ、多田淳之介、田上豊、福田修志）は各々の担当地域において、ホール担当者と対話を重ねながらプログラムをつくっていきました。

なかでもユニークだったのが、不登校の子どもたちが通うフリースクールへアウトリーチを行った神奈川県立青少年センターの試みです。この施設は青少年育成を目的とした施設で、これまで協働で事業を行うことのなかった舞台芸術課と青少年サポート課が連携して新たな事業モデルづくりに取り組みました。「じっくり時間をかけて子どもたちと向き合ったことによって、単なる創作にとどまらずコミュニケーションツールとしての演劇を体感してもらえた」（ホール担当者・藤岡審也さん）と教育的効果を実感したようです。

また、舞鶴市では3カ年計画による市民参加演劇プロジェクトの1年目として本事業を位置づけました。いわばキックオフ事業として高校へのアウトリーチや一般市民を対象としたワークショップを実施。派遣アーティストのごまさんは「3カ年計画にすることによって、ホール側も余裕をもって丁寧に地域と向き合えます」と本事業の新しい活用の仕方を示してくれました。

このようにリージョナルシアター事業は、多様なプログラムによってホールと地域の抱えるさまざまな課題と向き合うことができます。平成31年度の参加団体募集は後日詳細をお知らせいたします。多くの応募を心よりお待ちしております。

上：多田淳之介さんよるフリースクール合宿でのワークショップ（神奈川県）／下：ごまのはえさんによる地域の昔の写真を使ったワークショップ（舞鶴市）

地域通信

●データの見方
情報は地域ブロック別に、開催地の北から順に掲載してあります。●で表示してあるのは開催地です。✉マークが付いている事業は地域創造の助成事業です。ラインの下は、事業運営主体、住所、電話番号、担当者名の順に記載してあります。色帯部分が事業名で、以下、内容を紹介しています。

●地域ブロック
[北海道・東北]北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島
[関東]茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川
[北陸・中部]新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知
[近畿]三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山
[中国・四国]鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知
[九州・沖縄]福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄

●情報提供先
ファックス、電話、e-mailでお願いします。
Fax. 03-5573-4060　Tel. 03-5573-4066
letter@jafra.or.jp
地域創造レター担当

●2018年6月号情報締切
4月27日(金)

●2018年6月号掲載対象情報
2018年6月～8月に開催もしくは募集されるもの

地域創造ウェブサイト「人材ネットバンク」掲載情報募集中
当財団ウェブサイト内に以下の情報を掲載するページを設けています。
◎公共ホール等の求人情報
◎公共ホール等で実施する人材育成研修の開催情報
掲載・申込方法など詳細はウェブサイトをご覧ください。　http://www.jafra.or.jp/

北海道・東北

●札幌市
北海道立三岸好太郎美術館
〒060-0002　札幌市中央区北2条西15
Tel. 011-644-8901　中村聖司
http://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/mkb/

開館50周年記念／リニューアル記念 mima, 明日へのアーティストたちとともに～夢魔とポエジイ～
開館50周年とリニューアルオープンを記念し、また活動の幅をさらに広げることを目的に、北海道の若い作家を継続して紹介していく企画。第1回の今回は三岸好太郎の詩的イメージに着目し、その特色と通じ合う制作を見せる北海道ゆかりの若いアーティスト6名の絵画作品約40点を、三岸作品約30点とともに紹介する。
[日程]2月24日～4月11日
[会場]北海道立三岸好太郎美術館

舩岳紘行《母体》(2013年／作家蔵)

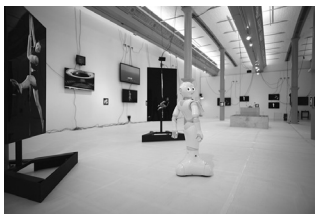
関東

●茨城県日立市
日立シビックセンター
〒317-0073　日立市幸町1-21-1
Tel. 0294-24-7755　大友悠輝
http://www.civic.jp/

日立シビックセンター市民音楽企画2018 第28回ひたち出身者によるコンサート「音楽の園」
市民による実行委員会の企画を協働で開催する同事業。日立市にゆかりのある若手音楽家を紹介するとともに、地元の音楽活動の担い手を生み出すコンサートにもなっている。クラシックから日本の伝統音楽まで、毎回バラエティに富んだ音楽家が出演する。28回目を迎える今回は、柴田崇考(ピアノ)、薄井美伽(ソプラノ)、照沼美弦(チェロ)、石井里佳(ピアノ)の4組。
[日程]4月22日
[会場]日立シビックセンター

●茨城県水戸市
水戸芸術館現代美術ギャラリー
〒310-0063 水戸市五軒町1-6-8
Tel. 029-227-8111　山峰潤也
http://arttowermito.or.jp/

ハロー・ワールド ポスト・ヒューマン時代に向けて
人工知能や仮想通貨などの新しい技術が進歩する現代に、技術革新がもたらす時代の光と影について、映像や写真、インスタレーション、ロボットによるパフォーマンスなど、多彩な表現方法を通して考える。デヴィッド・ブランディ、小林健太、サイモン・デニーなど国内外で活躍するアーティスト8組が出展。
[日程]2月10日～5月6日
[会場]水戸芸術館現代美術ギャラリー


セシル・B・エヴァンス《溢れだした》(2016)
Courtesy of the artist and Emanuel Layr Galerie, Vienna

●群馬県太田市
太田市／太田市文化スポーツ振興財団
〒373-0026 太田市東本町16-30
Tel. 0276-55-3036　小金沢智
http://www.artmuseumlibraryota.jp/

太田の美術vol.1「生誕90年 正田壌 芸術は遊びの極致」
太田市の文化芸術において重要な作家を紹介するシリーズ。第1弾は、太田市を代表する洋画家・正田壌の生誕90年を記念した回顧展。人物や昆虫、動物などを独自のフォルムとマチエールで描き出した初期作から2013年の絶筆までを展示。素描や資料に加え、正田が絵画を学んだ山口薫ら郷土の画家の作品も展観することで、知られざる側面も紹介する。
[日程]2月2日～4月8日
[会場]太田市美術館・図書館

●群馬県高崎市
高崎映画祭
〒370-0831　高崎市あら町202
Tel. 027-326-2206　鈴木萌
http://takasakifilmfes.jp/

第32回高崎映画祭
地方でもさまざまな映画を観る機会をつくるため、1987年に有志の市民たちで始めた伝統の映画祭。16日間にわたり、今年の最優秀作品賞『エルネスト』(阪本順治監督)、最優秀監督賞『海辺のアリア』(小林政広監督)をはじめ、さまざまなカテゴリーの全68作品が市内各地で上映される。バックステージツアーやトークイベントなどの関連企画も開催予定。
[日程]3月24日～4月8日
[会場]高崎市文化会館ほか

●埼玉県川口市
川口総合文化センター・リリア
〒332-0015　川口市川口3-1-1
Tel. 048-258-2000　高野真樹
http://www.lilia.or.jp/

中核市・川口　移行記念　かわぐち祝祭オーケストラ演奏会
平成30年4月1日の川口市中核市移行を記念して開催されるコンサート。指揮は、川口市出身でドイツを拠点に活躍する浮ヶ谷孝夫。ピアニストには、東京芸術大学准教授の青柳晋を迎え

る。また、管弦楽にはかわぐち祝祭オーケストラ(協力：東京ニューシティ管弦楽団)が出演し、華やかな演奏会となる。
[日程]4月14日
[会場]川口総合文化センター・リリア

●横浜市
鶴見区民文化センター サルビアホール
〒230-0051　横浜市鶴見区鶴見中央1-31-2　シークレイン内
Tel. 045-511-5711　鷹野由来
http://www.salvia-hall.jp/

サルビア・アーティストバンク2018 SHOWCASE

「アーティストを紹介してほしい」という区民の声に応え、2016年にスタートした「サルビア・アーティストバンク」では、ホールがアーティストを紹介し、調整や進行を補助することで文化芸術にふれる機会を積極的にサポートしている。本公演は2018年度の登録アーティストのお披露目公演。新規登録アーティスト6組を含む13組が、多彩なパフォーマンスを披露する。
[日程]4月7日
[会場]鶴見区民文化センター サルビアホール

北陸・中部

●石川県金沢市ほか
いしかわ・金沢
風と緑の楽都音楽祭実行委員会
〒920-0856 金沢市昭和町20-1(石川県立音楽堂内)
Tel. 076-232-8111　山田正幸
https://www.gargan.jp/

いしかわ・金沢 風と緑の楽都音楽祭2018

ラ・フォル・ジュルネ金沢を引き継ぐ形で昨年から始まった大型フェスティバル。GWに金沢をはじめ石川県や福井県、富山県など北陸のまちが音楽であふれる。モーツァルトをテーマに、ウラディミール・アシュケナージ、辻井伸行、オーケストラ・アンサンブル金沢によるコンサートをはじめ、田中泯や桂米團治らの出演による「くらしっくà la carte」などさまざまなコンサートが行われるほか、北陸三県のジュニア・オーケストラや児童合唱団のコンサート、参加型プログラムなど、総勢2,700名の出演者による多彩な催しが各地で行われる。
[日程]4月28日～5月5日
[会場]石川県立音楽堂、金沢市アートホールほか石川県内各所

昨年の様子。JR金沢駅鼓門下で行われた開幕宣言(オープニング・ファンファーレ)

●長野県松本市
松本市音楽文化ホール
〒390-0851　松本市島内4351
Tel. 0263-47-2004　中村・伊波
https://www.harmonyhall.jp/

松本市音楽文化ホール オルガン設置30周年記念コンサート「私が、もういちど、生まれ変わる日。」

1987年に設置されたパイプオルガンの30周年を記念するコンサート。設置以来、4代の専属オルガニストにより200回を超えるコンサートが行われた。今回は現専属オルガニスト原田靖子のほか、松本市を中心に活動する中信合唱連盟加盟団体、SK松本ジュニア合唱団により、新たに委嘱した新作「私が、もういちど、生まれ変わる日。」が披露され、今後を見据えたオルガンの新たな旅立ちを祝う。
[日程]4月15日
[会場]松本市音楽文化ホール

●岐阜県大垣市
大垣市文化事業団
〒503-0911 大垣市室本町5-51
Tel. 0584-82-2310　高木紀子
http://www2.og-bunka.or.jp/

2018大垣音楽祭スプリングコンサート～世界3大ピアノと日本を代表するピアノの共演～

世界3大ピアノと言われるベヒシュタイン、スタインウェイ、ベーゼンドルファー、そして日本のヤマハのフルコンサートピアノが一堂に会し、4人のピアニスト(近藤嘉宏、黒岩悠、山本貴志、浜野与志男)の研ぎ澄まされた演奏で個性的な響きの違いを楽しむ。地元愛好家を育てることを目的に、大垣市在住の若手ピアニストも共演する。
[日程]4月15日
[会場]大垣市スイトピアセンター

●静岡市
SPAC–静岡県舞台芸術センター
〒422-8019　静岡市駿河区東静岡2-3-1
Tel. 054-203-5730　成島洋子
http://festival-shizuoka.jp/

ふじのくに⇄せかい演劇祭2018

2011年から開催している国内外の多彩な舞台芸術作品を上演する国際演劇祭。今年はフランスのクロード・レジ最後の演出作『夢と錯乱』やトーマス・オスターマイアー(ドイツ)『民衆の敵』をはじめ、メキシコやオーストラリアの現代劇、ノルウェーのダンス作品など、日本を含む6カ国の8作品が上演される。SPACは芸術総監督・宮城聰の演出で、愛知県芸術劇場と共同で企画した新作『寿歌』(作：北村想)と、代表作の『マハーバーラタ～ナラ王の冒険～』を上演。会期中は市街地でのパフォーマンスやトーク、茶摘み体験などの関連事業も予定。
[日程]4月28日～5月6日
[会場]静岡芸術劇場ほか

『マハーバーラタ～ナラ王の冒険～』(演出：宮城聰)　©日置真光／HIOKI Masami

近畿

●神戸市
「ジャズの街神戸」推進協議会
〒650-0017　神戸市中央区楠町4-2-2
Tel. 078-351-3597　三島美智代
http://jazztownkobe.jp/

KOBE JAZZ DAY 2018

今年で4年目を迎える「KOBE JAZZ DAY 4／4」(神戸ジャズの日)の記念イベント。2014年に神戸市文化奨励賞を受賞したトランペッター広瀬未来と、名古屋を中心に活動するThree Arrowsが共演し、協議会初のプロデュースバンド「神戸ユースジャズオーケストラ」などが“ジャズの街・神戸”を盛り上げる。今回は野外会場も拡大し、一般公募で集まったアマチュアによる演奏も見どころのひとつ。
[日程]4月8日
[会場]神戸文化ホール、神戸市立中央体育館前広場

●神戸市
神戸市立小磯記念美術館
〒658-0032　神戸市東灘区向洋町中5-7
Tel. 078-857-5880　廣田・高橋
http://www.city.kobe.lg.jp/koisomuseum/

コレクション企画展示「絵の中の音を聞く」

クラシック音楽を愛し、楽器をモチーフに数多くの作品を残した小磯良平を中心に約20名の画家の作品から音楽や会話、物語にまつわる作品を紹介する。絵から聞こえるはずのない音や

声に“想像”という耳を傾けることで、絵の中の世界を感じる楽しさを伝える。なお同館では毎月開催しているマンスリーコンサートで、美術・音楽の双方の視点から小磯作品を親しみやすく紹介している。
[日程]2月17日～4月15日
[会場]神戸市立小磯記念美術館

中国・四国

●島根県松江市
島根県立美術館
〒690-0049　松江市袖師町1-5
Tel. 0852-55-4700　蔦谷典子
http://www.shimane-art-museum.jp/

**受贈記念
奈良原一高《肖像の風景》**

松江市出身の日本を代表する写真家・奈良原一高の《肖像の風景》シリーズ全161点を、作家より一括寄贈されたことを記念して開催される展覧会。雑誌「新潮45＋」の連載「ザ・リーダー」のグラビアとして撮影された同シリーズの貴重なオリジナルプリントが展示されるのは、1985年の個展「肖像の風景」以来33年ぶり。
[日程]1月25日～5月7日
[会場]島根県立美術館

奈良原一高《森英恵 ファッション・デザイナー》(1985年／島根県立美術館蔵)

●岡山県真庭市
真庭エスパス文化振興財団
〒719-3214　真庭市鍋屋17-1
Tel. 0867-42-7000　岡村一郎
http://kuse-espace.jp/

ミュージカルVivo 第17回エスパス公演『～明日へつなぐ架け橋～』

真庭市を拠点に活動しているミュージカルVivoの定期公演。今回は、4歳から21歳までの計60人が出演し、ダンスとバレエを披露。若さあふれるパワフルなダンスや、幼い子どもたちのポップな可愛いダンスなど、変化に富んだ構成でいきいきとした舞台を繰り広げる。手づくりの衣装でダンスの楽しさと魅力を伝えていく。
[日程]3月31日、4月1日
[会場]エスパスホール

●岡山県瀬戸内市
瀬戸内市立美術館
〒701-4392　瀬戸内市牛窓町牛窓4911
Tel. 0869-34-3130　関洋平
http://www.city.setouchi.lg.jp/museum

**国吉康雄展
ここは、私の遊び場**

16歳で岡山を離れてアメリカに渡り、類い稀な色彩センスと独自の絵画技法により、数々の栄誉を受けた国吉康雄。アメリカ芸術家組合の初代会長として人権・社会活動にも取り組み、多くのアーティストに影響を与えた生涯とその時代を見つめ直す。岡山大学国吉康雄研究講座により、ギャラリーツアーやドキュメンタリー映画上映会を開催。
[日程]3月17日～4月15日
[会場]瀬戸内市立美術館

九州・沖縄

●佐賀県佐賀市
佐賀県立博物館・美術館
〒840-0041　佐賀市城内1-15-23
Tel. 0952-24-3947 山崎・立畠・岩永
http://saga-museum.jp/museum/

**肥前さが幕末維新博覧会特別展
「温故維新―美・技のSAGA―」**

幕末・明治維新期を中心に現代までの佐賀の美術家の名品を、“美”“技”をテーマに紹介する展覧会。近代洋画界をリードした百武兼行や久米桂一郎、岡田三郎助をはじめ、佐賀県出身のアーティストである池田学や吉岡徳仁までの美の系譜、そして佐賀県の染色家である鈴田滋人氏の木版摺更紗など人間国宝の代表作を含め、佐賀のものづくりの底力・奥深さを伝える。
[日程]3月17日～5月13日
[会場]佐賀県立博物館・美術館

●長崎県佐世保市
アルカスSASEBO
〒857-0863　佐世保市三浦町2-3
Tel. 0956-42-1111　古賀沙矢香
http://www.arkas.or.jp/

**アルカスSASEBO文化茶話
没後100年 ドビュッシーの想像の旅～「前奏曲集第1巻」をめぐって～**

2年前からスタートした年間1人の作曲家に注目して、複数の主催公演を組む「Mプロジェクト」。今年は没後100年となるフランスの作曲家ドビュッシーに着目し、日仏友好160周年にあたることからフランスにもテーマを広げ、プログラムを組んでいく。第1弾の今回は、ピアニストであり文筆家である青柳いづみこを迎え、演奏を交えながらドビュッシーの魅力に迫る。
[日程]4月21日
[会場]アルカスSASEBO

●熊本県熊本市
熊本市現代美術館
〒860-0845　熊本市中央区上通町2-3
Tel. 096-278-7500　池澤茉莉
http://www.camk.or.jp

渚・瞼・カーテン　チェルフィッチュの〈映像演劇〉

演劇作家である岡田利規(チェルフィッチュ主宰)が境界のありようをテーマにつくる6本の〈映像演劇〉によって構成される演劇公演・展覧会。投影された映像が人の感覚に引き起こす作用によって、展示空間を上演空間へ変容させようとする試み。映像と演劇の境界をも曖昧にし、新しい感覚と経験を生み出す展示を目指す。
[日程]4月28日～6月17日
[会場]熊本市現代美術館

《第四の壁》(2017-18 プロダクションショット)　撮影:加藤甫

●宮崎県宮崎市ほか
宮崎国際音楽祭事務局
〒880-8557　宮崎市船塚3-210
Tel. 0985-28-3208　牛島香
http://www.mmfes.jp/2018/

第23回宮崎国際音楽祭

1996年から開催しているクラシック音楽祭。今回は、「アジアの音、アジアの心」をテーマに、チョン・キョンファ(ヴァイオリン／韓国)、チョーリャン・リン(ヴァイオリン／台湾)をはじめとする、アジアから巣立ち世界を舞台に活躍する演奏家たちによる宮崎ならではのプログラムや、仲代達矢を迎えたトークコンサート、ミュージックアカデミー inみやざきで選ばれた若手演奏家のコンサート、気軽にクラシックが楽しめるワンコインコンサートなど、さまざまなプログラムが行われる。
[日程]4月28日～5月13日
[会場]メディキット県民文化センターほか

＊地域創造レターは再生紙を使用しています

●制作基礎知識シリーズ Vol.43「東京2020 東京文化プログラム」

東京2020大会に向けてのホストシティの取り組み

制作基礎知識シリーズ Vol.43
東京文化プログラムと Tokyo Tokyo FESTIVAL

講師　山名尚志
（株式会社文化科学研究所代表）

「TURN in BRAZIL」
五十嵐靖晃氏交流プログラム in PIPA
（2016年8月～ 9月／リオデジャネイロ）
photo: RAFAEL SALVADOR
写真提供：東京都、アーツカウンシル東京

「東京キャラバン in 熊本」
リーディングアーティスト：近藤良平
（2017年10月／熊本県熊本市、山鹿市、天草市）
撮影：宮井正樹
http://tokyocaravan.jp/
写真提供：東京都、アーツカウンシル東京

＊1　後に「TURN」として事業化。

2013年、東京にオリンピックが54年ぶりに帰ってくることが決まった。東京2020大会である。この大会の開催に向け、東京都では、14年12月に新たな総合計画である「東京都長期ビジョン」を発表、その基本目標の第一に「史上最高のオリンピック・パラリンピックの実現」を掲げた。

史上最高の大会を実現するためには、オリンピック憲章に実施の義務が記載されている文化プログラムもまた、史上最高のものとなる必要がある。本稿では、この実現に向けてのホストシティ東京の取り組みを紹介する。

●東京文化ビジョン

東京都長期ビジョンに基づく文化についての東京都の基本計画が、15年3月に発表された「東京文化ビジョン」である。同ビジョンは、「東京都の芸術文化振興における基本方針」および「国際的に発信する東京の文化政策の世界戦略」であるとともに「2020年大会に向けた文化プログラムの先導的役割」を示すものとして性格付けられている。オリンピックの文化プログラムを主語として言い換えるなら、都の文化プログラムは、単体の事業としてではなく、都の文化芸術の振興や文化による東京の世界発信と一体のものとしてポジショニングされている。

では、東京文化ビジョンの内容はどうなっているのだろうか。ビジョンの8つの戦略を見ると、2020年を超えた戦略として文化振興の領域・目標ごとに7つの戦略を設定、それを加速させる8つ目の戦略として「文化戦略8：東京がもつ芸術文化の力で、都市力を引き出し史上最高の文化プログラムを実現」が置かれ、具体的な内容として、2020年までの時期における「世界に向けての東京の魅力の発信」と、それ以降に向けての「有形・無形のレガシー」の次世代への継承が規定されている。東京都の文化プログラムは、大会の時期には東京を世界に発信するための重要な事業として、また、2020年を超えては東京の文化芸術の長期振興と継承の契機として大きく期待されているのである。

なお、東京文化ビジョンでは、具体的な文化プログラムの事業として、文化プログラムの先導的役割を果たすリーディングプロジェクトの実施（「東京キャラバン」や「障害者アートプログラム」等）(*1)が、文化プログラムの執行体制の整備として、①アーツカウンシル東京の強化、②都立文化施設の新たな運営方針の策定、③東京都芸術文化振興基金の創設が挙げられている。

●これまでの展開

上述したように、東京都の文化プログラムは、単体事業としてではなく、東京都全体の文化芸術施策と一体化して展開されており、アーツカウンシル東京や各都立文化施設により、東京2020大会を意識した多数の事業が実施されてきた。ここでは、その中でも、執行体制の中核であるアーツカウンシル東京が2020年までの文化プログラム事業として（＝事業の集大成を東京2020大会に照準を合わせたもの）展開しているものを簡単に紹介する。

まず一つ目が、東京文化ビジョンでもリーディングプロジェクトとして記載されていた「東京キャラバン」と「TURN」である。東京キャラバンは、劇作家・演出家・俳優である野田秀樹氏が、「人と人が交わるところに『文化』が生まれる」のコンセプトの下に多種多様なアーティストや地域の住民、伝統芸能関係者などが文化混流のワークショップや共同での創造を行うもの。15年の東京・駒沢に始まり、16年はオリンピックに合わせてリオデジャネイロで開催。その後、仙台と相馬、六本木を回り、17年は京都、八王子、熊本と全国を巡回している。今後、北海道、秋田県、いわき市、川越市、富山県、豊田市などでも展開が予定されている。

一方のTURNは、監修に美術家の日比野克彦氏を迎えたアートプロジェクトで、「『人と違う』ことに価値を見出そうとするアートの特性を活かし、障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの属性や背景の違いを超えた」プログラム展開を行ってきている。15年から始

まったこのプロジェクトの特徴となっているのは、アーティストと障害のある人や生きづらさを抱えた若者たち、家族、支援者との出会いである。16年3月、東京都美術館で行われた「TURNフェス」では、そうした出会いから生まれた作品を展示。「TURN」の中核活動となる交流プログラムでは、アーティストが福祉施設や福祉コミュニティに赴き、相互に作用しあう交流を重ねており、リオ大会時にはブラジルでも行われた。

アーツカウンシル東京の文化プログラム事業としてもう一つ展開されているのが「Tokyo Tokyo FESTIVAL助成」である(*2)。これは、①大会の機運醸成となる話題性・祝祭性の高いプロジェクト、②都民の日常的・主体的な芸術文化活動、③アートとテクノロジーの融合による新たな表現や技術へのチャレンジ、④海外からのアーティスト等の東京での新作発表支援の4つの領域で最大2,000万円の助成を行うもの。地域の実行委員会によるまちづくりの演劇活動から、一般企業が主催する各種の文化芸術フェスティバル、明治座やホリプロなどの文化企業の公演事業まで多様な企画が助成対象となっている。

●Tokyo Tokyo FESTIVAL

以上見てきたように、東京都ではすでに数多くの文化プログラム事業を展開してきている。予算額も非常に大きく、2017年度の「文化プログラムにおける東京の芸術文化の創造・発信」施策だけでも30億7,595万円が計上されている。

一方、課題も意識されてきた。最大の課題は、これだけの資金が投入されている中で、東京都の文化プログラムが、必ずしも全都民、多くの国民が知るものとはなっていないことである。この課題を解決するための施策として、2017年11月に発表されたのが、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」。同施策の基本は、東京文化プログラム自体のプロモーションであり、それを実現するため、ショーアップされた発表会と象徴となる目玉イベントを実施していくこととされている。この結果、東京都の活動は、2020年の大会期間を含む約半年間を本番のTokyo Tokyo FESTIVALとして、それまでは「Road to Tokyo Tokyo FESTIVAL」として、すべてが同じ傘の下に入ることとなった(これまでの事業は、民間などに対する助成事業および土台となるプログラムとして、同フェスティバルの傘の下に継続される)。

全体のプロモーション統括は、東京芸術文化評議会の川上量生評議員が、東京文化プログラムの統括プロデューサーとして中心的な役割を担う。川上氏は、カドカワ株式会社(角川・ドワンゴグループの持ち株会社)の代表取締役であり、ニコニコ動画の立ち上げで知られるIT・コンテンツ業界の有力者である。プロモーションの具体計画はまだ発表段階には至っていないが、氏のノウハウとネットワークを生かした実効的なプランが期待される。

一方、すでに動いているのが目玉イベント実現のための企画公募である(*2)。これは、東京都とアーツカウンシル東京が主催する文化プログラム自体を公募しようというもので、「インパクトある芸術創造」「あらゆる人々が参加できる」「アートの可能性を拡げる」いずれかの目的に添っていれば、ジャンルを問わず、また個人から非営利団体、企業まで誰もが応募可能(ただし、自治体については、単独では応募できない)という極めて自由度が高いものとなっている。また、イベントの実施の場所についても、既存の文化施設にとらわれないより自由な展開を目指している。

目玉イベント公募の決定は2018年7月頃に予定されている。おそらく、Tokyo Tokyo FESTIVALとしての強力なプロモーションも、そこを起点に開始されていくことになる。

現状想定されている予算規模から考えるならば、東京2020大会の文化プログラムの主役は、国でも、組織委員会でもなく、ホストシティである東京都である。大会の文化プログラムがどこに向かうのか。2018年夏を期待して待ちたい。

＊2「東京文化プログラム助成」から名称変更。

＊3　2018年3月8日時点の応募総数は2,436件(海外28カ国・地域からの応募を含む)。

＊地域創造レターは再生紙を使用しています

山梨県甲府市

コラニー文化ホール ミュージカル『シンデレラ〜ねずみたちのプリンセス』

写真提供：コラニー文化ホール

●ミュージカル『シンデレラ〜ねずみたちのプリンセス』甲府公演
[主催]アドブレーン・共立・NTT-F共同事業体
[会期]2018年3月10日、11日
[会場]コラニー文化ホール 小ホール

＊1　生涯学習学科として音楽教育コース、美術教育コース、芸術運営コースを有していたが、2016年4月に教育人間科学部が教育学部に改組されたのに伴い、学校教育課程芸術身体教育コース（音楽教育系、美術教育系、保健体育系）に再編され、芸術運営コースは廃止。

＊2　1965年生まれ。演出家、翻訳家、俳優。ロンドン大学演劇科修士。劇団昴を経て、東京藝術大学・新国立劇場オペラ研修所講師など多方面で活躍。

＊3　コラニー文化ホールの自主事業
鑑賞事業のほか、約50人が在籍するやまなしジュニアオーケストラ、全館を使って4日間で約40の多彩なワークショップを行う「あなたの文化を見つけよう！」、ロビーを無料で市民の発表の場として開放する「ミルケ県民ステージ」、5日間で約60団体がステージに立つ「フェスタ県文」、面白クラシック講座（年12回）、ふるさと山梨巣立ちコンサート、山梨大学や甲斐清和高校との連携事業などがある。

＊4　オリジナル作品：『MABOROSI〜オペラ源氏物語』（2014年）、山梨出身のチャイルドフッドというバンドのステージと芝居とダンスを構成した『HAPPY』（15年）。平成30年度は4作目として演劇作品の制作を予定。

＊5　1989年生まれ。山梨県立甲府西高等学校吹奏楽部から東京藝術大学音楽学部声楽科へ進学。現在は東京で声楽家、俳優として活躍。

地域のレパートリーになる山梨産ミュージカルを目指す『シンデレラ〜ねずみたちのプリンセス』が3月10日、11日にコラニー文化ホール（山梨県立県民文化ホール）で上演された。これは、2015年に山梨大学生涯学習学科(＊1)の学生たちが自主制作した作品をベースにしたもの。コラニーがプロデュースし、2016年から2年かけてブラッシュアップ。昨年2月にコラニーでお披露目し、11月から北杜市公演やアウトリーチなどを行い、スキルアップしながら今回の再演を迎えた。

演出家の三輪えり花(＊2)を除き、学生時代にこのミュージカルをつくった脚本・作詞のクボタリナと作詞・作曲の伊藤駿、振付の深沢由美、衣装・大道具・小道具制作を担った山梨大学芸術運営コースの学生、山梨出身の音楽大学などの学生、小・中・高校生、地元劇団の俳優などの出演者、地元演奏家によるオケなど、オール山梨にこだわり、衣装も地元企業の和紙素材「ナオロン」で製作した。

●

今回のミュージカルでは、舞台三面のスクリーンに映像を投影しておとぎ話の世界を表現。シンデレラの幸せを願う6匹のネズミが魔法使いにお願いし、夢を叶えてもらう。オペラのような1幕と地元バレエ団も登場するディズニー・ミュージカルのような2幕で構成。地元の観客を楽しませていた。

2009年からコラニーを指定管理者として運営する共同事業体で事業を担っているのが山梨日日新聞社、山梨放送のグループ会社であるアドブレーン社だ。尾沢明彦事業部部長は、「地域のメディアとして地域の文化振興に貢献したいという思いがある。何でもいいので誰もが文化に触れられる、関われる施設という理念を掲げ、さまざまな事業を実施している(＊3)。加えて、地域の人材を発掘して“打ち上げ花火にならない再演可能な作品をつくる”という方針で、オペラなどのプロデュースを行い、今回の『シンデレラ』で3作目になる(＊4)。伊藤さんの高校の先輩で、オペラに出演してもらった山野靖博さん(＊5)から面白い作品だからブラッシュアップしてホール公演ができないだろうかと相談されたのがきっかけ」と話す。

プロのサポートが必要だと考え、山野さんの指導者で、山梨とも縁のあった三輪さんに演出を依頼。地域作品と関わった経験をもつ三輪さんは、「東京からスタッフを呼ぶと地域の人の力で再演できなくなる。自分たちだけでもできるという自信をつけてもらうために2年かけて人材を育てようと話し合った」と言う。

16年春から本格的にリメイクに着手。脚本、構成を変え、楽曲も増やして半分以上をつくり直した。伊藤さんは、「生涯学習学科の音楽、美術、芸術運営の3コースは同じL号館5階（通称エルゴ）にあって仲が良く、一緒に何かやろうとエルゴ・プロジェクトと称してミュージカルを自主制作した。僕にとってこれが初めての劇作品で、未熟なものをつくり直す機会をもらえてとても感謝している。山梨出身で音楽を続けている若い世代は繋がりが強く、『シンデレラ』がそういう音楽家や地元劇団、学生など色々なジャンルの人の交流の場、一緒に創作できる枠組みのひとつになってくれたらいいと思う」と言う。

尾沢さんに頼りにされていたのが、来年度から学部の再編で廃止されるという芸術運営コースの11人の学生たちだ。「色々な人が集まってひとつのものをつくることの力強さを感じた」「日常生活の中では絶対に経験できないことがたくさん詰まっていた。より良いものをつくろう、今よりもっと高みを目指そうという創作の現場に自分も感化された。こういう力は生きていく上で絶対に必要なものだと思った」「プレイヤーを支えるという素晴らしい役割についてもっと広めることが必要なのに、芸術運営コースがなくなるのはとても悲しい」など。それぞれの言葉で振り返っていた。

尾沢さんは、「『シンデレラ』がなければ、私たちと大学との関係もこんなに近くならなかった。夏には学生と一緒に新しいプログラムをやりたい」と言っていたが、人が人を呼び、そこで出来た信頼（関係）を形にするというコラニーの姿勢がこのホールの居心地の良さを支えているのだと感じた。　（編集部：坪池・高野）